

林業大学校における学生満足度の規定要因

—京都府立林業大学校を事例に—

小川 高広 (名古屋大学農学部)

教育の質と関係性が高いとされる満足度について、卒業前の学生に質問紙調査を行った。クロス集計等で検証し、次の3点が明らかになった。1. 学生の6割は教育・カリキュラムに満足と答え、その学生は教員の熱心さを実感していた等の特徴が見られた。2. 教育・カリキュラム満足度が高い学生は、林業に関係しない情報等の知識やスキルが向上したと考えていた。3. 過去に林業の学習を経験した学生と教育・カリキュラム満足度との間には関係性はなかった。以上から教職員と学生との良好な関係や林業に直接関係しない知識・スキル向上が満足度に関係していた。満足度の維持や向上には学生との良好な関係構築や林業以外の教育の充実が重要だといえる。
キーワード：林業大学校、森林・林業教育、林業従事者育成、学生満足度、質問紙調査

I はじめに

1. 林業大学校

我が国の林業従事者数は減少が続き、新規就業者の確保や人材の育成は喫緊の課題だと考えられている(24, 25, 26)。人材の育成のため、平成24年(2012)に京都府立林業大学校が新設されて以降、全国各地で同様の動きが相次いでいる(注1)(6, 7, 26)。平成29年(2017)には兵庫県と和歌山県に林業大学校が新設された(5, 32)。平成30年度には三重県で新設が予定され、北海道では誘致活動が、宮崎県では既存機関の強化が検討されている(1, 2, 5, 18, 19)。

平成18年(2006)に6校だった林業大学校は平成28年(2016)4月1日現在、14校にまで増加している(23, 26, 27)。

2. 先行研究

森林・林業教育に関する研究はいくつか存在する。林業大学校については千代らが学生を対象に意識調査を行った(3)。カリキュラムや授業、実習などの満足度は大学校により大きく異なることを報告した。専門高校である森林・林業系高校については早尻らや井上らの研究がある(4, 7)。早尻らは生徒の満足度を含む学校生活と進路について調査を行った。林業職を目指す生徒の約7割が学校生活に満足と回答し、学習態度は積極的だった。それに対し、進学などを目指す生徒の満足度は約6割にとどまり、消極的だった。これらの結果は希望する進路の違いによるものだと報告した。井上らは林野庁の森林・林業系高校に対する調査結果を分析した。9割以上の学校が林業分野へ人材を輩出していたが、林業の知識を有した教員は極めて限られていると報告した。教育強化のため、林業大学校などとの連携の必要性に言及した。

以上のように、満足度は林業大学校や希望進路より差異が生じること、林業大学校との連携の必要性が

報告された。しかし、先行研究では満足度の要因について詳細を明らかにしていない。また、林業への就職を大前提にした林業大学校と多様な進路が想定されている専門高校では状況が異なる。そのため、必ずしも同様の結果が得られるとは限らない。林業大学校と、専門高校の連携を今後進めるにしても、林業大学校に関する研究の蓄積は十分とは言えない。現状では林業大学校について十分に把握されていないまま、設立が相次いでいる。量的な拡大が進んでいるものの、教育の質をどのようにして、確保していくのか、大学など他の教育機関同様に今後の課題になると考えられる。

教育の質保証に関する議論が盛んである昨今、教育現場では講義・授業アンケートや生活に関する調査を実施し、教育・学習環境の改善を主な目的とした生活実態の把握が進められている。その中でも学生満足度は「学生のニーズと教育改革・教育政策との距離を推し量る重要な指標」として考えられ、特に重要視されている(10)。満足度に関する既存の研究は大学を中心とした個別の教育機関を対象としたものが多い。人間関係や教育・支援体制、施設などの環境要因が満足度に影響を与えているとされ(11)、「教員が授業に熱心であると、学生は授業に満足」し、学生の生活も勉強中心となり、大学生活を楽しむようになることなどが報告されている(29, 30)。

3. 目的

本研究では林業人材育成の重要な役割を担う林業大学校に在籍する学生に質問紙調査を行い、学生生活に対する満足度がどのような要因によって決定づけられているのか明らかにすることを目的とする。そのために以下の仮説を設定し、分析することとした。なお、本研究での満足度とは「教育・カリキュラム」に対する学生の満足度合のことを指す。

1. 少人数の学習環境である林業大学校では教員と

学生の距離が近いことから、教員との関係性が学生の満足度に影響する。

2. 学習経験を通じ、知識習得や意識変化の程度が高まった学生は積極的に学習に取り組んだと考えられることから満足度に影響する。

II 研究対象の概要と調査方法

1. 調査対象の概要

京都府立林業大学校（以下京都林大）は相次ぐ林業大学校新設の先駆けとなった大学校の一つである。

林業大学校の現状を把握する上で有益な情報が得られると考え、調査対象とした。京都林大は平成24年

（2012）4月に西日本初の林業専門大学校として開校した（16）。丹波地域の木材集積地として栄えた京丹波町和知（わち）にあり、京都府森林技術センター（木材利用推進室）や京丹波町和知支所に隣接している。

学科は森林林業科と研修科がある。森林林業科には林業現場で活躍する人材の育成を目指す林業専攻と、現場のみならず林業分野で幅広くその知識を活用できる人材の育成を目指した森林公共人材専攻がある。1年次は林業の基礎を主に学び、2年次に専攻別の教育を受ける。修業年限は2年で、学生は学習成果が認定される京都府独自の資格取得も可能である。林業専攻では高性能林業機械操作研修や実地研修を受け、試験に合格すれば「高性能林業機械操作士」を、森林公共人材専攻では連携する京都府立大学で公共政策に関する専門講義の受講やNPOなどでの地域活動研修を経て「森林公共政策士」が付与される（16）。なお、本研究では林業従事者や府民向け講座を実施する研修科は、調査対象としていないため、詳細は別の機会とする。

京都林大では円滑な大学校運営や充実した教育を実現するため、林業業界や地域との関係を大切にしている。京都府下の森林組合、木材組合、林業関連企業などと「林業の担い手交流・育成協議会」や地元行政機関などと「地域連携協議会」を設立し、教育・実習、インターンシップ、就職斡旋、学生への生活支援などが包括的に行われている（16, 28, 33）。また、本格的な高性能林業機械を導入した操作教育や「三行脈型濃厚実習」と呼ばれる実習がある。これは樹幹分析を学ぶ森林科学実習、バックホー操作を学ぶ作業道作設実習、プロット調査などを学ぶ森林計画演習の3科目で構成され、一週間ごとに異なる実習を交互に行う。学生は3班6名程度に分けられ、少人数での実習が受けられ、集中的に学習ができる。インターンシップでは「キャップストーン」と呼ばれる研修に力が入れている。キャップストーンとはピラミッドの頂点に置かれる石のことである。この研修は学習の総仕上げ「実学実習」と位置付けられている。学生は卒業後に即戦力として林業現場で活躍できるように、基礎・専門教育科目の学習を積み上げてきた。この研修ではその成果を發揮

してもらおう（16, 21, 22, 33, 34）。

学生募集は推薦入試が年に1回、一般入試が前・後期2回実施される。募集状況では3回目もある。出願資格は高等学校もしくは中等教育学校の卒業生（卒業見込みの者含む）、またはこれら同等以上の学力があると知事が認める者で、入学時点で40歳未満の者である。推薦入試では出身高校の校長や大学学部長、団体の長（市町村長や森林組合の長）が推薦する者で小論文と面接が課せられる。一般入試は現代文（小論文を含む）や数式的処理（数と式、三角比）の学力検査および面接がある。いずれも学力検査、面接、成績証明の結果を総合的に判断し、合格者を決定する（12, 13, 14）。

教員は常勤（専任）11名、非常勤64名が在籍し、事務職員は常勤（専任）が1名いる。非常勤教員は主に地元林業業界からの支援を受けている（22, 33, 34）。

森林林業科の定員は各学年20名である。平成28年度は1年生17名（男性15名、女性2名）、2年生20名（男性18名、女性2名）、計37名が在籍している。学生の年齢は10代26名（70.3%）、20代5名（13.5%）、30代5名（13.5%）、40代以上1名（0.03%）と高校を卒業した10代から大学を卒業した20代、社会人経験者まで幅広い。学生の出身地域は7割が近畿地方出身者で占められ、京都府出身者は11名（全体の29.7%）である（12）。卒業後の進路は学生のほとんどが林業に就職している。1期生から3期生までの卒業生59名のうち、51名が林業に就職した（34）。

2. 調査方法

林業への新規就業を目指す森林林業科の学生37名のうち、平成28年度に卒業を予定する2年生20名に対し、平成29年（2017）3月に質問紙調査を実施した。質問は学生の属性、大学校での生活・学習状況、卒業後の進路に関する3部構成・計25問とした（表-1）。形式は選択式単一質問を基本とし、様々な学生調査を参考にした（8, 9, 20, 31）。入学の理由や林業に対する知識や興味関心を高めた学習活動については「とても重要・重要・それほど重要ではない・全く重要ではない」、林業や大学校生活に対する印象や意識については

表-1. 質問した主な内容

学生の属性 (13問)	性別、年齢、出身地・居住場所、学歴・専攻、入学前の職業、保護者の職業、奨学金受給、林業大学校を知ったきっかけ、入学理由など
生活・学習状況 (6問)	大学校生活に対する印象や意識、知識や興味・関心を高めた学習活動、授業で獲得した知識・スキル、入学後の学習継続頻度、成績など
卒業後の進路 (6問)	卒業後の進路、林業への就職に対する印象や意識、進路に関する考えなど

「強くそう思う・そう思う・そう思わない・全く思わない」、授業で獲得した知識・スキルについては「とても向上した・向上した・変わっていない・低下した」、入学後の学習経験では「よく経験した・時々経験した・あまり経験しなかった・全く経験しなかった」、卒業後の進路については「とてもよくあてはまる・少しあてはまる・あまりあてはまらない・全くあてはまらない」の4段階評価(4:3:2:1)、強制選択尺度とした。

満足度の規定要因分析のため、単純集計後「教育・カリキュラム」に満足かどうか尋ねた質問に対して、肯定的な学生(教育不満足群)と否定的な学生(教育不満足群)に分け、他の質問項目とクロス集計により、両者の特徴を確認した。相関関係の強弱を見るため、悉皆調査では本来必要とされないフィッシャーの正確確率検定を用い、参考とした。有意水準は5%を採用した。4段階評価では平均値を算出し、差異を調べた。

Ⅲ 調査結果

1. 回答者の概要

調査対象の森林林業科の2年生20名全員から回答を得た。回答者の性別は男性が85.0%、女性15.0%であった。年齢構成は19歳から32歳までとなっており、20歳が65.0%を占めた。平均年齢は21.7歳であった。出身地域は70.0%が近畿地方で、そのうち京都府出身者は最も多い57.1%であった。近畿以外では北海道(5.0%)、東北(10.0%)、中部(5.0%)、四国(10.0%)となった。実家の場所は50.0%が都市部となっており、次いで農村部(30.0%)、山村部(15.0%)、その他(5.0%)であった。最終学歴は80.0%が高卒者で、大卒や短大・専修学校卒が各10.0%、院卒や中卒はいなかった。最終学歴の専攻は、林業・林学(30.0%)、農業・農学(15.0%)、その他(普通科など)が最多の55.0%であった。入学前の職業は70.0%が生徒・学生で、会社員・団体職員やフリーター(各10.0%)、林業従事者や建設業従事者(各5.0%)もいた。

保護者の職業は、林業に関係しない者が多かった(表-2)(注2)。なお「父など」と記したのは学生の家庭状況に配慮したためである。奨学金受給者は80.0%で、その内訳は緑の青年就業準備給付金(56.3%)、京都府修学資金制度(6.2%)、不明(37.5%)であった(注3)。林業大学校を知ったきっかけは学校の先生などの紹介(55.0%)、インターネット(25.0%)、テレビ・ラジオ・新聞(10.0%)、学校や職場などの掲示板(10.0%)が挙げられた。卒業後の進路は全ての学生が林業分野に就職すると回答した。業務の内訳は80.0%が林業現場作業職、15.0%が林業現場のマネジメントなどの管理関係職、その他が5.0%であった。

2. 満足度

「教育・カリキュラム」(教育満足度)について

「満足」と答えた者は60.0%で、「不満足」は40.0%であった(注4)。その他の質問では「教務等の事務」が75.0%、「教員の指導方法や熱心さ」は70.0%、「教育施設・設備」は60.0%の者が「満足」と回答した。

「教育・カリキュラム」について、「満足」と回答した学生(教育満足群)と「不満足」と回答した学生(教育不満足群)で分けてみたところ、教育満足群の方が全体的に満足していた(表-3)。大学校生活への印象や意識については「入学し、学習できたことが嬉しい」と「教職員が親身になってくれる」「林業大学校が好き」では教育満足群の全ての学生が、不満足群でも6割以上が「思う」と答えた。「辞めたいと考えたことがある」との質問には教育不満足群でも6割は「思わない」と回答した。「入学したことを後悔している」との質問は全ての学生が「思わない」と答えた。教育満足群や不満足群問わず、肯定的に大学校のことを考えていることがわかった。しかし、「家族や友人に入学を勧めたい」との質問には「思う」と「思わない」で割れた(表-4)。

次に「教育・カリキュラム」に対する満足度と上述の大学校での生活に対する印象や意識に関する質問をクロス集計し、有意差を見た。その結果、「教務等の事務」「教員の指導方法や熱心さ」「林業大学校が好き」「辞めたいと考えたことがある」で有意差が見られた。これら質問に対し、「思う」と回答した学生は「教育・カリキュラム」への満足度が高かったと言える。学生の属性に関わる、性別、居住場所、最終学歴、奨学金受給の有無、成績(高校時代・林業大学校時代)などの項目では有意差は確認されなかった。

3. 知識習得や意識変化の程度

林業大学校での授業(座学・実習)により獲得した知識やスキルの変化については、林業に関する項目で、教育満足群・不満足群ともにほとんどの者が「向上した」と回答した(表-5)。次に「教育・カリキュラム」に対する満足度とクロス集計し、有意差を確認した。

表-2. 保護者の職業

(%)	会社員	自営業	建設業	公務員	林業	無職等
父など	45.0	20.0	10.0	5.0	5.0	15.0
母など	40.0	10.0	0.0	5.0	0.0	45.0

表-3. 教職員・施設の満足度(教育満足度とクロス集計)

(%)	教育満足群		教育不満足群	
	思う	思わない	思う	思わない
教務等の事務	91.7	8.3	50.0	50.0
施設・設備	75.0	25.0	50.0	50.0
教員の指導方法・熱心さ	91.7	8.3	37.5	62.5

表-4. 林業大学校に対する印象・意識（教育満足度とクロス集計）

質問項目	教育満足群		教育不満足群	
	思う	思わない	思う	思わない
入学し、勉強できたことが嬉しい	100.0	0.0	75.0	25.0
先生や職員は親身になってくれる	100.0	0.0	75.0	25.0
林業大学校が好きだ	100.0	0.0	62.5	37.5
林業大学校を辞めたいと考えたことがある	0.0	100.0	37.5	62.5
入学したことを後悔している	0.0	100.0	0.0	100.0
家族や友人に自分の大学校を勧めたい	70.0	30.0	50.0	50.0

表-5. 学習を通じ獲得した知識やスキル（教育満足度とクロス集計）

質問項目	教育満足群		教育不満足群	
	向上した	向上せず	向上した	向上せず
日本の林業の現状についての知識	100.0	0.0	100.0	0.0
世界の林業の現状についての知識	100.0	0.0	87.5	12.5
林業作業の技術	100.0	0.0	100.0	0.0
林業の重要性	100.0	0.0	100.0	0.0
林業作業時の安全に対する意識	100.0	0.0	100.0	0.0
自分の考えをわかりやすく述べること	83.3	16.7	37.5	62.5
文書能力	83.3	16.7	12.5	87.5
コンピューター、IT・情報操作	66.7	33.3	25.0	75.0

「林業作業の技術」など、林業に直接関係する知識やスキルに関する項目では有意差は見られなかった。だが、「自分の考えをわかりやすく述べる」「文書能力」「コンピューター・IT・情報操作」といった情報などのリテラシーに関する項目で有意差が見られた。これらの知識やスキルが向上したと考える学生は「教育・カリキュラム」に対する満足度が高かったと言える。

IV. まとめ・考察

1. 調査結果のまとめ

本研究では学生満足度の規定要因について検討を行い、以下のことが明らかとなった。

(1) 学生の6割は教育・カリキュラムに対し、満足と回答した。その学生には教員の熱心さを実感、教務等の事務に満足、辞めたいと考えたことがないなどの特徴が見られた。

(2) 林業には直接関係しない情報などのリテラシーの知識やスキルが向上したと考える学生は教育・カリキュラムへの満足度が高かった。

2. 学生満足度

本調査では学生の6割が「教育・カリキュラム」に満足と答えた。教員の指導方法・熱心さ、教務等の事務に満足、辞めたいと考えたことがなく、大学校のことが好きだと考えた学生は「教育・カリキュラム」への満足度が高かった。「林業大学校が好きだ」と教育満足群の学生だけでなく、教育不満足群の学生においても6割以上が「好きだ」と答えるなど、大学校への愛

着が示された。学校との関わりが密になるほど帰属意識や愛校心を強く持つと言われている(17)。教員の熱心さや親身になってくれる教職員の存在、学生数が20名と少数であることなど、学生と教職員の距離が近いことが、大学校への肯定的な意識につながったと考えられる。教員の熱心さなどが満足度に影響するとした、武内の示した結果と類似したものが得られ、仮説1は支持された(29, 30)。

学生が大学校に肯定的な感情を抱き、学生と教職員との間に良好な人間関係が構築できたことは、教職員が努力してきた結果だと言える。その校風は京都林大にとり財産である。だが、学生の多くは大学校への愛着を持っていたものの、他人に入学を勧めるかどうかは回答が分かれた。林業に対する将来への不安といった、我が国の林業が直面する厳しい現状と無関係ではないと考えられる。

3. 知識習得や意識の変化の程度

林業に関する知識やスキルの変化と満足度との間には有意差は見られなかった。一方で林業に直接関係しないと考えられる知識やスキルの向上が、満足度に影響を与えていた。よって仮説2は一部支持されたとと言える。

林業に関する知識やスキルが「向上した」と多くの学生が回答したことは実習などに力を入れてきた京都林大の取り組みの成果だと言える。林業に関する知識やスキルが向上すれば、学生の学習目的に沿っているため、満足度は上がると考えられた。だが、影響はな

かったと思われる。学生は林業大学校で学んでおり、林業の知識やスキルが向上することは当然だと考えていた可能性がある。林業に関する知識やスキルが向上したと学生が実感しなければ、逆に満足度は低下していたとも考えられる。

林業に関する知識やスキルを向上させていく現在の教育を引き続き実施していくことはもちろん、学生の満足度が高まるような教育上の工夫が必要である。また、林業以外の知識やスキルが向上したと考えた学生は高い満足度を示していた。京都林大が林業以外の知識やスキル向上にも積極的に取り組んでいることが関係していると考えられる。学生はレポートの作成や卒業研究などを通じ、パソコンに触れることや自分の考えをわかりやすく述べるプレゼンテーションの機会が日常的にあり、Word や Excel など学習する科目もある(15)。その成果が示され、林業以外の教育についても充実させることの重要性が示唆された。しかし、林業大学校での教育はあくまでも林業に関するものが中心である。その教育について、工夫を進めることが優先される。その上で、林業以外の教育とのバランスをうまく保ちつつ、学生の素質を見極めながら、よりよい教育を今後も提供していくことが重要である。

4.今後の課題

今回の調査では対象校が1校であった。林業大学校の現状をより正確に把握するためには調査対象を広げ、より多くの学生から回答を得ることが必要である。また、多角的な観点も重要である。そのために、学生の入試成績や入学から卒業までの成績変化や林業大学校での教育と実際に現場で必要とされる知識・スキルとのギャップについて、卒業生による教育の振り返りを通じ、明らかにすること、さらに卒業生を雇用する森林組合などからは、林業大学校が強化すべき教育について、その声を聞くことも不可欠である。これらのデータ収集や検証作業を今後の課題とし、研究成果を通じ、林業大学校や我が国の林業の発展に貢献できるよう、今後も研究を継続していく。

注記

(注1) 林業大学校には林業アカデミー、森林大学校、農林大学校などの名称がある。本研究では林業業界で一般的に用いられている「林業大学校」とした。

(注2) 質問紙の選択項目には、「農業」や「公務員(林業関係)」を設けていた。だが、回答者はいなかった。紙面の都合により、表から除いた。そのため表にある「公務員」には林業関係業務従事者は含まれていない。「会社員」には団体職員を、「無職等」には主婦(夫)・家事手伝いやフリーター・アルバイトを含んでいる。

(注3) 奨学金を受給するためには一定の条件がある。緑の青年就業準備給付金は、年間最大150万円(最長2

年)が政府の財源から支給される。林業への就職や短期間での離職時には返還義務が生じる。京都府修学資金制度は入学金・授業料相当分が支給される。緑の青年就業準備給付金に準じた条件や「府内」での林業への就職が課せられる。

(注4) 紙面の都合上「とても満足」「ある程度満足」を「満足」, 「あまり満足していない」「全く満足していない」を「不満足」, 「強く思う」「そう思う」を「思う」, 「そう思わない」「全く思わない」を「思わない」, 「とても向上した」「向上した」を「向上した」, 「変わっていない」「低下した」を「向上せず」として、それぞれ集計し、表記している。

謝辞

本研究では京都府立林業大学校校長只木良也先生、山崎拓男先生、志方隆司先生、森林林業科2年生の皆さんやその他大学校関係者の方々にご協力いただいた。また、放送大学愛知学習センター所長服部重昭先生、名古屋大学農学部竹中千里先生、田中隆文先生、同大学高等教育研究センター丸山和昭先生、同大学ライティングセンターMark Weeks 先生、笠木雅史先生より貴重な助言や支援をいただいた。心よりお礼申し上げます。

引用文献

- (1) 芦別市(2017) 広報あしべつ(平成29年10月号) 「道立林業学校誘致へ市民一丸」「林業学校を芦別に市長だより」. 芦別市役所 http://www.city.ashibetsu.hokkaido.jp/kikaku/hisyo/kouhou_folder/kouhou_h2910.html (平成29年10月5日参照)
- (2) 美唄市(2017) 美唄市役所 平成29年度第5回経営会議の概要「道立林業大学校の誘致について」 <http://www.city.bibai.hokkaido.jp/jyumin/docs/2017062600022/平成29年9月13日参照>
- (3) 千代宗平・本間丈瑠(2016) 全国の林業大学校学生の意識調査. 中部森林技術交流発表会要旨集 中部森林管理局
- (4) 早尻正宏・林大輔(2006) 森林・林業系高等学校の生徒像と教育課題. 日林誌 88 : 95-102
- (5) 兵庫県(2017) 森林大学校の紹介 https://web.pref.hyogo.lg.jp/cs01/moridai2017_3.html (平成29年9月10日参照)
- (6) 井上真理子・大石康彦(2016a) 戦後の専門高校「森林科学」(育林分野) 関連科目の変化と課題. 日林誌 98 : 11-19
- (7) 井上真理子・大石康彦(2016b) 森林・林業教育を行う高等学校の現状—2014年林野庁の全国調査をもとにした分析—. 日林誌 98 : 255-264
- (8) 株式会社ディスコキャリアリサーチ(2016) 「インターンシップに関する調査 2015年度特別調査」

- (9) 株式会社リクルートマーケティングパートナーズ・一般社団法人全国高等学校 PTA 連合会 (2016)「高校生と保護者の進路に関する意識調査」
- (10) 岸岡洋介・山内一祥・泉谷美智子・平尾智隆 (2010) 学生生活の満足度を決定する要因ー 学生生活状況調査データの分析. 大学教育実践ジャーナル 8 : 9-15
- (11) 喜始照宣 (2014) 美術系大学における学生の 大学生生活満足度の規定要因 : 学生を対象とした質問紙調査をもとに. 大学教育学会誌 36-2 : 86-95
- (12) 京都府立林業大学校 (2016a) 平成 28 年度 京都府立林業大学校の概要～次代の担い手と共に成長, 発展する大学校～
- (13) 京都府立林業大学校 (2016b) 平成 29 年度 京都府立林業大学校森林林業科学生募集要項 2-3
- (14) 京都府立林業大学校 (2016c) 京都府立林業大学校 森林林業科学生追加募集要項平成 29 年度 http://www.pref.kyoto.jp/kyorindai/documents/29bos_huu-tsuika_1.pdf (平成 29 年 5 月 7 日参照)
- (15) 京都府立林業大学校 (2016d) 平成 28 年度 京都府立林業大学校 科目概要・シラバス 平成 28 年度入学生用
- (16) 京都府立林業大学校 (2017) 平成 28 年度学校概要・活動記録
- (17) 丸山文裕 (2009) 大学の財政と経営. 東信堂
- (18) 三重県 (2017) 三重県における林業大学校「みえ森林・林業アカデミー」の開講に向けた概要 (三重県) <http://www.pref.mie.lg.jp/TOPICS/m0025700026.htm> (平成 29 年 9 月 13 日参照)
- (19) 宮崎県 (2017) 県議会の動き 平成 29 年 8 月. (宮崎県議会) http://www.pref.miyazaki.lg.jp/gikai/pr/move/h29_move56/move56.pdf (平成 29 年 9 月 13 日参照)
- (20) 名古屋大学 (2015) 「第 26 回学生生活状況調査報告書 (平成 27 年)」
- (21) 日本森林技術協会 (2011) 「京都府立林業大学校構想のねらい (特集 林業の“人材”育成の動きを追う!!)」。森林技術. 833 : 13-17
- (22) 日本森林技術協会 (2016) 特集実践タイプの 人材育成を目指す 7 林大+京都府立林業大学校. 森林技術. 895 : 4-5
- (23) 林野庁 (2007) 平成 18 年度版森林・林業白書 参考資料「参考付表 19 森林・林業関係の教育機関数」。全国林業改良普及協会 : 6
- (24) 林野庁 (2016) 平成 28 年度版森林・林業白書「第 I 章 国産材の安定供給体制の構築に向けて 1. 森林資源の充実と国産材需給の現況」。全国林業改良普及協会 : 10
- (25) 林野庁 (2017a) 平成 29 年度版森林・林業白書「第 I 章 成長産業化に向けた新たな技術の導入 3. 新たな技術導入のための条件整備 (経営力のある林業事業者等の育成)」。全国林業改良普及協会 : 31-34
- (26) 林野庁 (2017b) 平成 29 年度版森林・林業白書「第 III 章 林業と山村 (中山間地域) 1. 林業の動向 (4) 林業労働力の動向」。全国林業改良普及協会 : 109-113
- (27) 林野庁 (2017c) 平成 29 年度版森林・林業白書 参考資料「参考付表 19 森林・林業関係の教育機関数」。全国林業改良普及協会 : 6
- (28) 只木良也 (2017) 創設 5 年目 京都府立林業大学校. 山林 1593 : 2-9
- (29) 武内清 (1999) 学生文化の規定要因に関する実証的研究ー 15 大学・4 短大調査から. 大学論集 29 : 187-204
- (30) 武内清 (2008) 学生文化の実態と大学教育. 高等教育研究 11 : 7-23
- (31) 東北大学 (2016) 「平成 27 年度【東北大学 学生生活調査のまとめ】東北大学学生の生活」 (平成 28 年)
- (32) 和歌山県 (2017) 平成 29 年度専修学校和歌山県農林大学校学生募集要項 http://www.pref.wakayama.lg.jp/chi_ji/press/280713/280713_4.pdf (平成 29 年 9 月 10 日参照)
- (33) 全国林業改良普及協会 (2015) キャップストーン研修に大きな効果 : 開校 4 年目を迎えた 京都府立林業大学校 (特集 公的林業大学校による技能者育成 : 外部支援システムに独自の工夫)。現代林業. 591 : 26-30
- (34) 全国林業改良普及協会 (2016) 「定着する人材」 育成手法の研究 林業大学校の地域型教育モデル. 現代林業. 601 : 12-41